

550

44

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30^{6m} 1 2 3 4 5

始

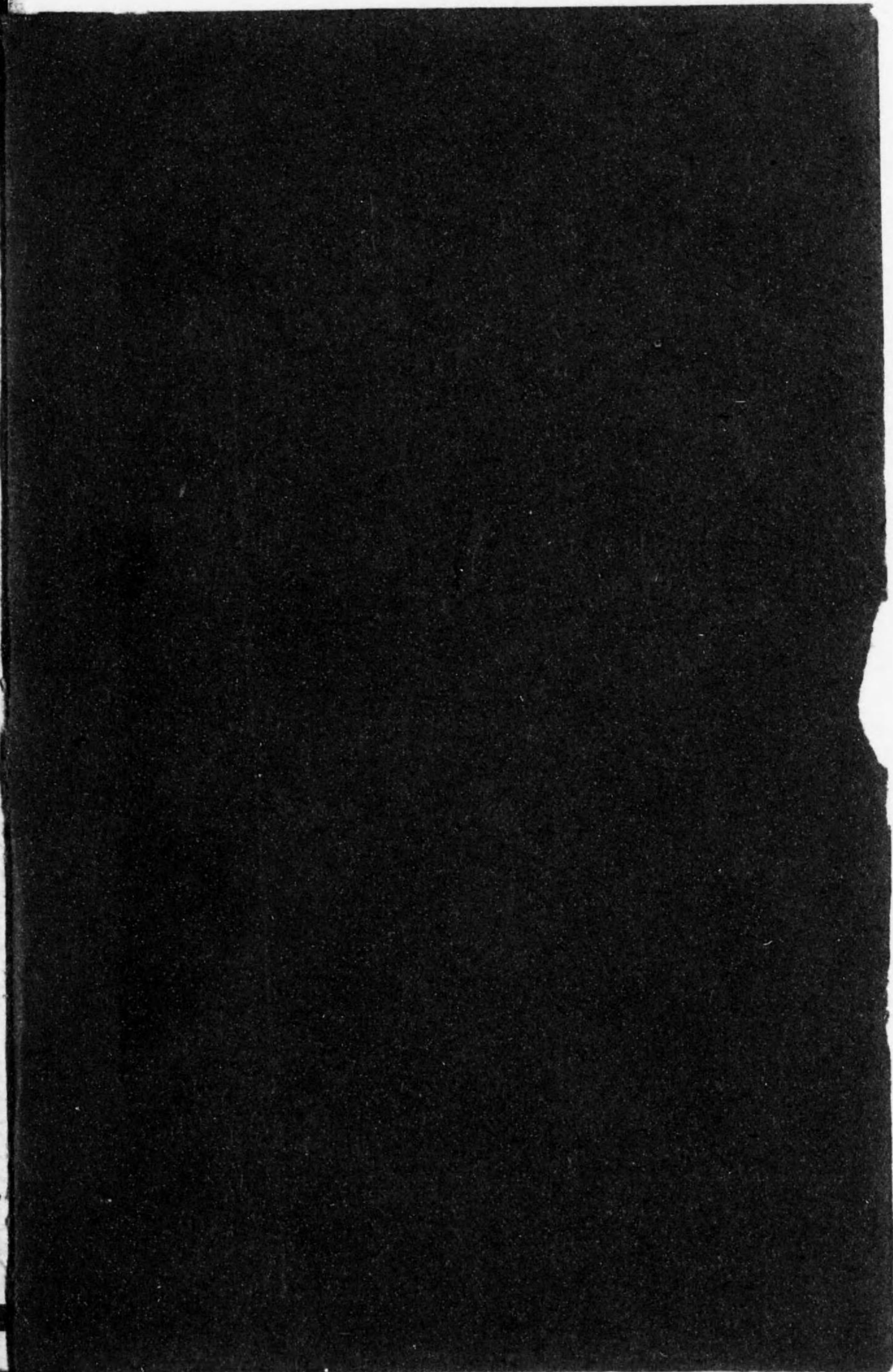
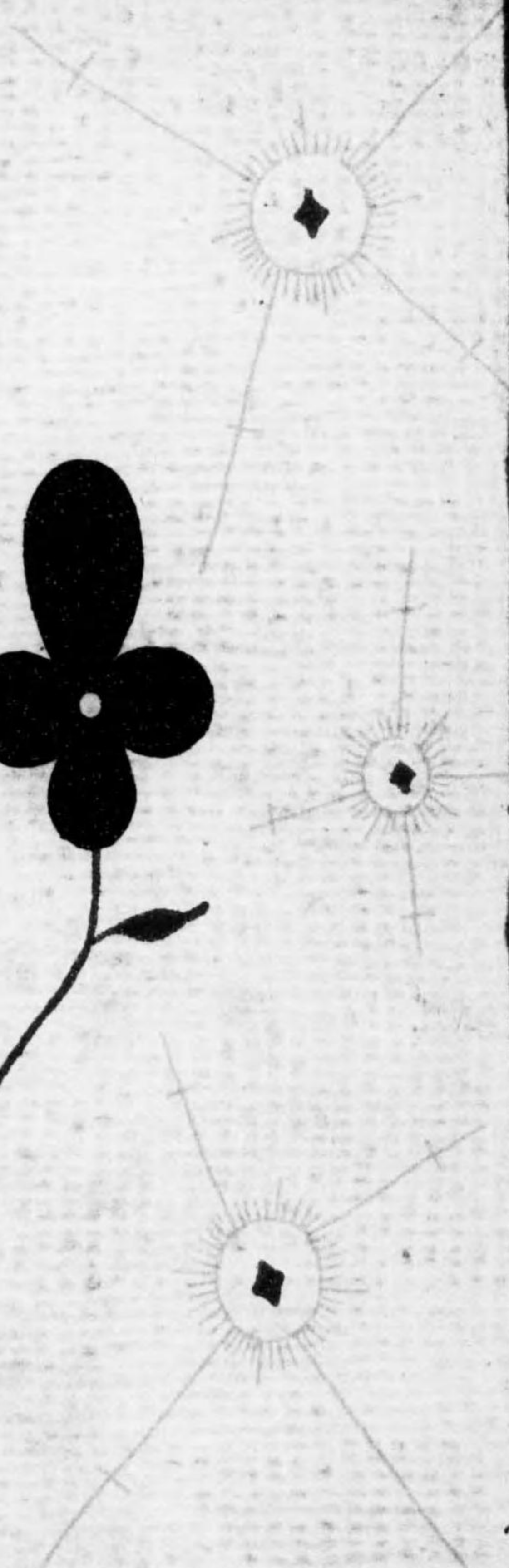
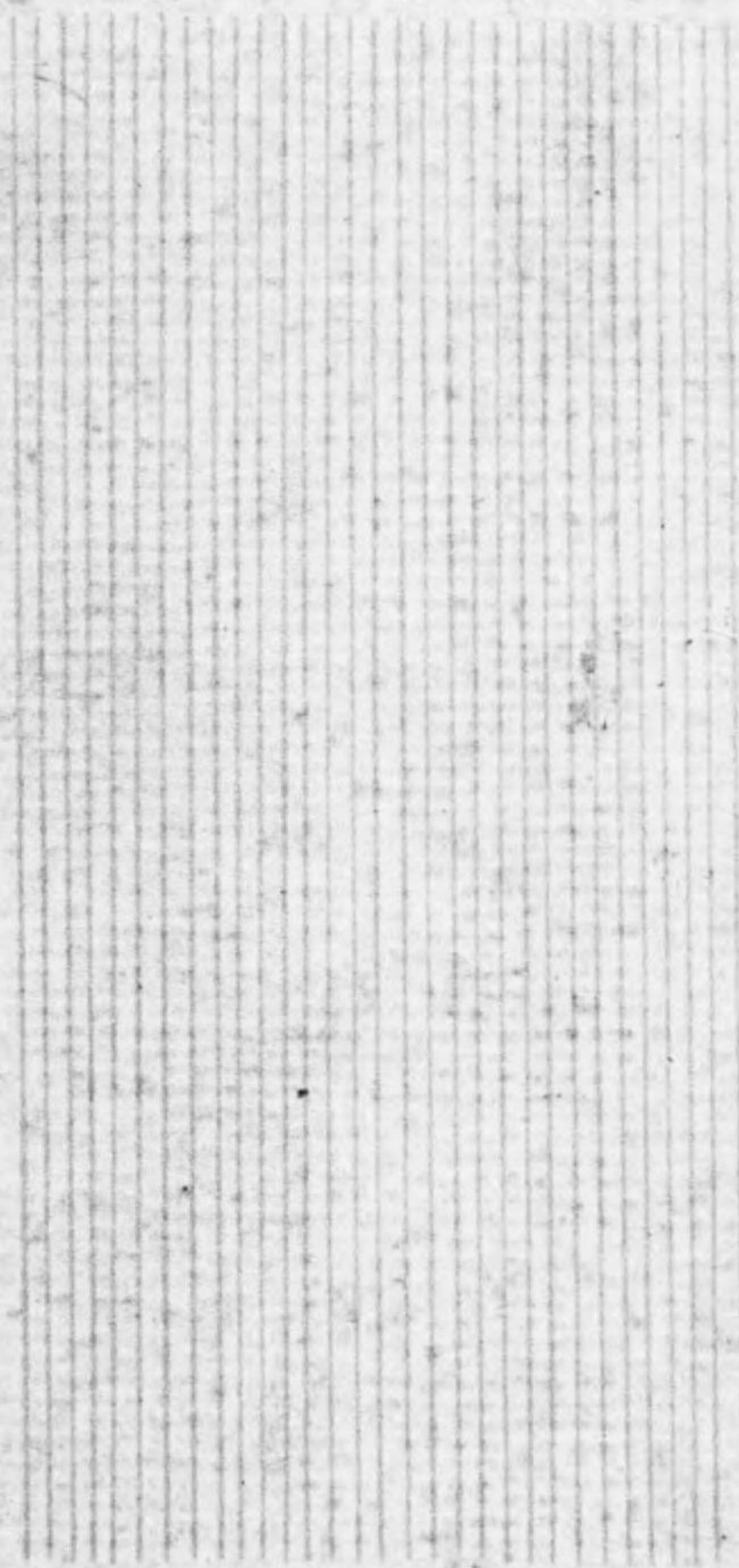


15.8.12

詩集

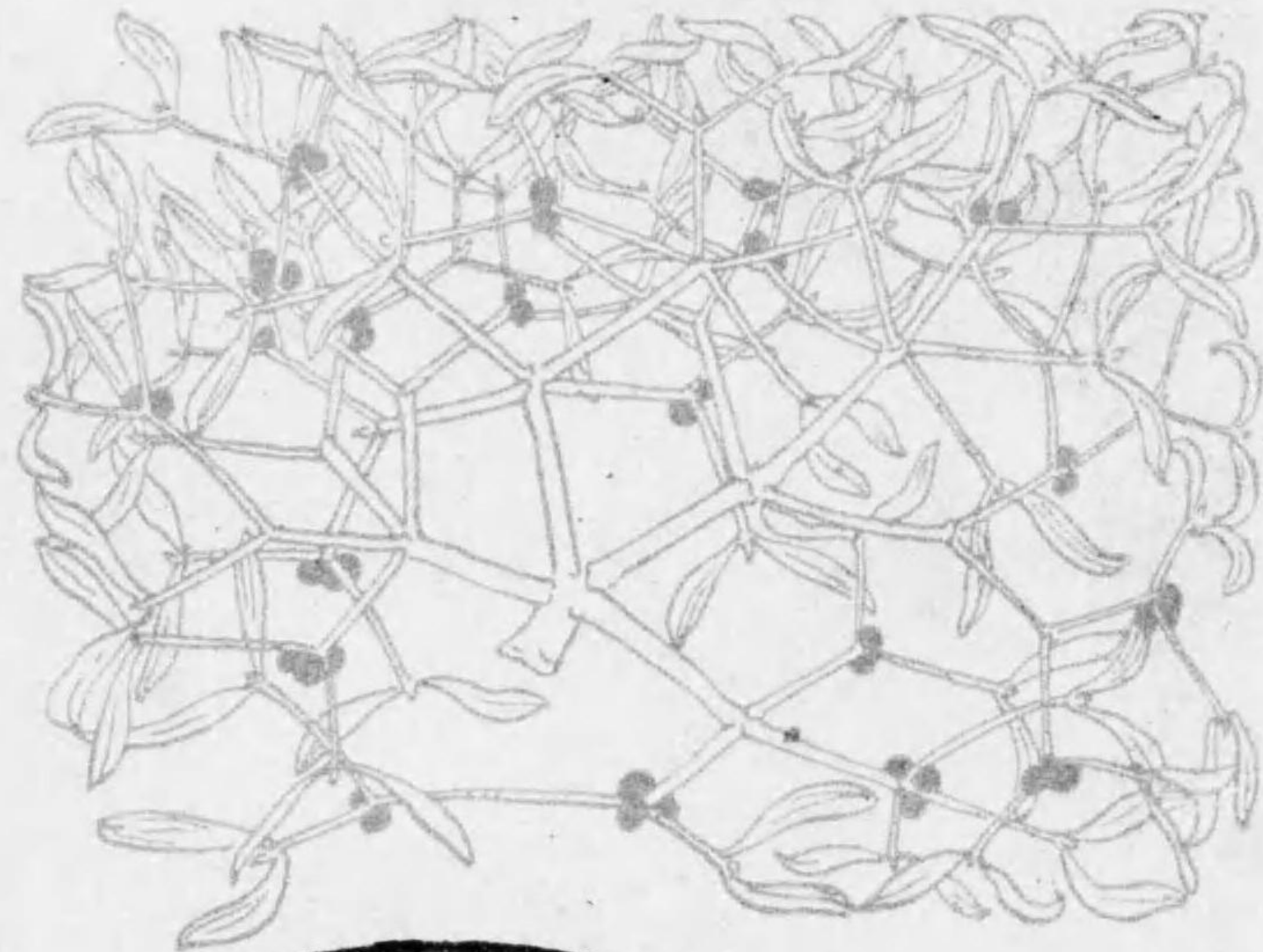
北風と薔薇

百田宗治著



詩集
北風と薔薇

百田宗治著



大正

15. 3. 22

東京金星堂出版

550-44

いつとはなしに照つてゐる陽

いつとはなしに過ぎてゆく鳥影とりかげ

宗

治

序

大正十一年暮から十二年の秋にかけての作二十四篇に、去年大阪住吉の家で書いた『北風と薔薇』十三篇を加へ、さらに四年前の冬に出した小曲集『新月』がかの震災時に紙型埋滅せるため、そのうちの大部分を収録してこの集を編んだ。わたしの小曲風

の作品の殆んどすべてがこのなかに包含されてゐるわけである。

『日なかの星』以下の章に入つてゐるおほかたの詩は、『新月』の序文にかいたやうに、いづれも今から十餘年前(十七八歳から二十一二歳頃迄)の作であつて、はじめの方の詩との間に、とうどそれだけの歲月の空白頁ブランクページがひそんでゐるわけだ、そしていま、作

者たるわたしもまたその間の歲月の生活をわが生涯の空白頁として見返らねばならぬ破目に立つてゐる。この集はわたしにとつて偶然にも意味深い一つのモニュメントの記念碑となつてしまつた。

大正十五年三月

著 者

目次

冬さうび

偶成	三
見えない鎖	六
笹の葉	九
ひよかぬ鐘	一〇
わが家の周囲	三

雪やなぎ	井戸傍	しぐれ	河鹿	雨	傷	秋雲	桐の木
.....
雪	罫	罫	三	三	三	毛	天

蓄音器	祈りの鐘	耕地の夕暮	雪ふれり	淡雪	かげ	窓	溪景
.....
元	元	三	三	天	完	四	三

新	V	IV	III	II	I	悪行五篇	日なかの星
月	捨てた魂	蟋蟀	雨雲	魚	星		
.....
三	一九	二六	三四	三三	二二	一一	一〇

思	夕	二	天	嘘
ひ	暮	篇	使	
.....
一〇	九		七	九

日なかの星

雨	一三三	
祈	禱	一三六
湖	一三〇	
糸	を垂る	一三三
蜻	蛉	一三三
河	原	一三五
雲	一三九	
祈	れる山	一四〇

わか	かへで	一四三
蟬	一四三	
夕	日	一四七
湯	島切通し	一四八
す	みだ川	一五一
ダ	リア	一五三
蟬	一五五	
あ	さのみそしる	一五七

風知草……………二六

さくら草

すぎゆく目……………二六

いかなる國より……………二六

山の奥より……………二六

君わが名を呼ぶ……………二六

われらかたみに……………二六

くちつくるは……………二七

出 現……………二七

圓 光……………二七

さくら草……………二八

はじめて見しとき……………二八

永 日……………二八

思 ひ……………二八

わが戀びとは……………二七

蜜	蜂	……	二四
人魚の歌	……	……	二六
巡	禮	……	三三
人魚の嘆き	……	……	三五
見送人	……	……	三七
夕暮	……	……	三三

何處の家の時計ぞ	……	……	一九〇
霜	……	……	一九一
朝	……	……	一九五
青き笠	……	……	一九六
時計	……	……	二〇三
夜の思ひ	……	……	二〇四
わが窓は閉されてほの暗し	……	……	二〇八
刺	……	……	二二

肉體の秋

窓のほとり……………二七七
肉體の秋……………二三八
野にいで……………二三九
落葉……………二四〇
威歴……………二四一
晝のらんぶ……………二四二

生 存……………二四五
雨の樂音……………二四七
心のそらの暴風雨……………二四九
鞆 鞆……………二五〇
秋の夜……………二五一
心より心へ……………二五二
蕎麥打つ唄……………二五三
祭の夜……………二五五

北風と薔薇

百田宗治著

海のあなたの	二七
落日の記憶	二九
花とわれと	三二
病める畫家	三三
夜の花	三五
秋	三六

冬
さ
う
び

偶成

しづかな秋の日だ

わたしの思ひ出は死に

わたしの戀は夙くにこの私を見捨てゝしまった。

生に賭けるわたしの希望は



夙くの昔にわたし自身で飲んでしまった。

さびしい窓べに

わたしは空のさかづきを透かしてみるばかり……

4

戸を叩いてわたしを訪ふのは誰だ？

だが立つてそこを開くかはりに

わたしはしづかに客人の去つてしまふのを待つてゐ

よう。――

5

見えない鎖

何とさびしく、ものしづかにわが家の一日は過ぎて

ゆくだらう、

二つの魂は離ればなれになつて

他のすることを一つは見ようとしなひ、

——そしてたえ間ない溜息

人が去つたあとは

物おとにおびえる貝の口のやうに

ふたゝび憂鬱の扉が音もなく閉つてしまふ。

見知らぬ他人か舊敵同志でゝもあるやうに

(それなら、或ひは罵り合ひ、また袂をわかつて離れ

去るであらうに)

吾々を縛つてゐる見えない鎖は

一體何でつくられてゐるのであらうか。

笹の葉

窓のそとの笹の葉

ゆれ揺れて止みもせず

くもり日の弱々しい日照りのなか

消えがてに

残る笹の葉。

ひゞかぬ鐘

鳴る音のさびしい風の行手よ

——わがこころは空虚

打てどもひゞかぬ埋れた鐘。

空ははてしなく延びて

たゞ風の跳梁のみ——

たちきられた希望の芽

みろしなはれた生存の

遠い地平。——

鳴る音のさびしい風の呼號よ

—それは虚無か。

わが家の周囲

あたらしく移り住んだわが家の前には
椈や櫟の枝さし交す深い茂みのなかへ
朝夕に潺湲たる音たてる小流れあり、
狭い小徑をへだてて
結び交されたささ垣のなかに

私の眼をたのしませる恰好の小庭もある。

晩秋の弱いしめやかな午後の日ざしに

わが庭は落葉で掩はれ

そのうへを飛びめぐる何びきかの蠅の群も

ともすれば休みがちに、季節のうしなはれしゆく暖

かみに惹かれてゐるやうに見える。

音もなく落こぼれる山茶花の白い花々、

訪ふ人もない物静けさに

私は椅子により、いつまでもその静寂と物悲しい甘

美のうちにひたつてゐる。

あらゆる騷擾も、係争も

遠ざかりゆく物賣りの聲と共に、あなたはるかな都

會の中空に消え去り

うづまく煤煙の旋回のなかに遠く見失はれる、

わたしの耳を敬たしめる何物の響きもない、

ただそれはあらゆる私の思ひ出よりももつと遠い

無限に遠い——だがその頃からあきらかにいつも私

の聴官の奥ふかく聽いてゐた

深い、しづかな自然の聲、

かすかに盡きせぬ魂のささやき……

あたらしく移り住んだわが家の前には

檜や樺の枝さし交す深い茂みのなかに

朝夕に潺湲たる音たてる小流れあり、

狭い小徑をへだてて

結び交されたまき垣のなかに

私の眼をたのしませる恰好の小庭もある。

蓄音器

蓄音器欲しいとおもふわが家に

朝ごとにいづくやらん遠くよりひびききたるその音

あり、

風つめたく晴れわたりたる蒼空のもと

そとろにひきしめられし糸のごとく

その音かなしきトレモロを奏してわが耳を訪づれき
たりぬ、

いづくの家の誰がすすびぞ

かく朝ごとにいとびやかに蓄音器をたのしめるは

……

あるときは賑やかなるオルケストラの

雲のあなたよりする軍兵のごとく

あるときはすぐれし獨唱の

そとろに澄みわたる朝の氣をふるはせてひときぬ。

巷をはなれし朝夕のわが住居なれば

さて門外に聲かけて訪ひきたる友もなし、

妻は茶の間に

われは部屋にこもりてたゞひとり書など繕き居るに

わが家にももしあのごとき蓄音器のひとつありて
このめる西歐の樂人の曲などこゝろゆくまでたのし
みえんにはと

さすがに寂しきおもひもしつ、

はてはこのほがらかなるはつ春の朝に
たゞひとりそをたのしめる遠き隣人の
こゝろなげなる顔かたちなど怨めしく

はらだゝしきまでになりぬ。

朝ごとに

されど愉しく、こゝろゆかしく

たえぐなる進行曲、

あはれにさびしき祈禱の曲などつゞきて
風のまにまにひゞききたりぬ。

遠く耳をすませば

こまやかなる曲のあとなどおぼろげながら手にとる

ごとく

その音まことにかの妙なる空のエーテルの中より生

れきたるかと思はれぬ、

朝餉あさけを終えて机にむかふとき

われいつとしもなく霜どけする庭の日あたりの方に

眼をはなちて

とぎれ／＼のその遠き樂の音を追ふが常となりぬ。

さればはじめに怨めしくはらだしく思ひなせしこ

となど

いつしかに心を去りて

かくは朝ごとに余がこゝろを愉たのしませ

あらぬ方に余が耳をかたむけしむるその見知らぬ家
の蓄音器に

ふしぎなる親しみのこゝろさへ起るやうになりぬ、
わが家にひとつの蓄音器さへなきことはかなしけれ
ど

さて機械のこと、レコードの取換へなどに心を勞す
ることなく

まことに自然の小鳥がうたひ、風が樂がくを奏すると同
じごとく

朝ごとにひゞききたるこの妙たなる樂曲を耳にしうる
ことのうれしさを思ひて

いつしかに心の安んじゆくをおぼえぬ

誰が家の誰がすさびぞ、

かくも朝々にわがこゝろを愉たしまするは

祈りの鐘

何といふ美しい空だ、

(あの氣まぐれな秋の終りの季節が過ぎて

亟寒と嚴蕭の冬の玉座が定まつたのだ)

今朝！ 空は無限の濃い青藍色に塗りつぶされて

あだかも中世教會の高い色硝子の窓を見るやう、

ゆふべの陰雨と濕潤を追ひ拂つた北風の楯はあとか

たもなく

そそりたつ一本の檜の木の頂きに

その名残りの小揺れがとどまつてゐるばかり、

見えがたい祈禱の列が

いまおごそかにわかれらの頭上を過ぎてゆくやうだ

降りそそぐ日の下に

遠く近く、私がいま耳にするのは
看經の音でもあるか、朗らかなお祈りの鐘のひびき。

耕地の夕暮

何といふ蕭やかな、そしてものの匂ひに充ちた夕暮

だらう、

みわたすかぎり、ひろい耕地の上を靄がとざしてし

まつた、

そのむかふに朧めく丘々の低い影繪、

人家の灯が芝居の書割のやうに遠くへだたつてなら

び

そのうへに覆面かぶかみの月が出てゐる。

32

小流れにかかつた腐れ木の橋を渡つてゆくと

何か口誦みながら懐ろ手の人が向ふからも遣つてくる。

うす闇のなかでわたし達は徑をゆづりあひ

そしてまた遠く右と左に別れてしまふ。

はるかな街道の明い灯の前を

濃い霧ゆきかを透してうごくさかな人の往來ひ、

33

車の轍のひびき。――

二人の男女が私の傍らを通り抜けて

つと寄り添ひながら黒々と茂つた櫨の木の向ふに消
え去る。

吹く風は生暖かいが

なんとなくうら枯れて底冷たい耕地の夕暮。

雪ふれり

雪ふれり

音もなくふりつみぬ

庭の樹樹、右、土のうへ

罪^ひ罪として、白く、舞ひつつ……

彼女は出でゆきぬ

言もなく、見知らぬ人のごとくに

ある朝ふりつむ雪に

わがみいでしは塵芥にまみれし部屋

わがひとりなる家。

雪ふれり

音もなくふりつみぬ

庭の樹樹、石、土のうへ

罪罪として、白く、舞ひつつ……

淡雪

桔^{はなつる}棒の竿にわづかな淡雪がつもつてゐる
手に持つとはらはらと水のなかに落ちる
汲^{くみ}み上げる桶のなかに
はやそれは融けこんで再び上つてくるのだらう

かげ

戸をたてようとして格子をひらくと
廂のかげの落ちてゐる先き
狭^{こま}い徑をへだてて
まだ雪が一行に白く残つてゐる
—それに

さびしい灰いろの幽霊のやうな木樅もくけの枝と
物干竿のかげがうすくうつつてゐる
空には月があり
ほそいせせらぎの音もする。

窓

かなしくも見上げて過ぎぬ
ひとつの窓、
かたく閉しされて人氣も無き……
かなしくも見上げて過ぎぬ

その窓、
さびしき「拒絶」の概念がねんにも似たる。

溪景

うつり來しわが部屋
窓ごしに遠き丘見え
丘のへに
まだ春さむき櫻樹おうじゆのならびたる。
日ごと夜ごと

そのしたの人家じんかにけむり上りて
ゆふべしらぐと霧のこむる。

雪やなぎ

雪やなぎ

さいめきかはし白き花々のむつみゐる
そを求めかえりぬ。

雪やなぎ

細々としてしなやかに床にかゝりて
すごしぬ、^わ作びて三日。

井戸傍

井戸傍にて、皿、古き九谷の湯呑など洗ひ居れば
へだてたる板塀のそと

たのしげに語らひゆく女子供の群れあり
空晴れてうつくしき日なれば
何處にか梅見になどおもむくならむ

さて、そのあとはあたゝかき日だまりにして
落ちしきし小石の上などに
しづかに午後の日のあたりたる。

しぐれ

ばらばらと

とたん、屋根を叩いてゆく音がする
月が出てると思つたに……。

——雨が降つてるのだらう、

何氣なしにいふと

——さうかしら、と藝者の一人が立ち上つたが、

いえ、お月さまが照つてらつしやるわ、と

障子のそとで聲がした、

——潮來の夜だつた。

今夜もあの帯のやうなほそい水の上に

眞孤の茂みに

時雨が過ぎてゐるかしら……。

河鹿

宿とどの女中きたりて

日暮れなば

あの橋のたもとに行きて

ともに河鹿かじかを聴かんなどよ約しぬ、

かゝることもさびしき慰めのひとつとなりて

いまは日の暮るゝを偏ひとへに待ちわぶ。

雨

少しさむくなつて来たと思つたら

階下から火鉢を持つて来た。

女客がふたり二階のてすり

顔を見合せて

困つたやうに雨を見てゐる。

雨の音が溪流の音かわからぬ。

むかふの溪間から

白いけむのやうなものがむくむくと上つてきた。

どら、火鉢を懐ろにかゝえこんで

また堂々廻りの考へごとでもつづけようか。

傷

いまこそ怒りの何者であるかを私は知つた、

わたしはそれを何處へ持つて行つていゝかを知らな

し。

深山の奥にたゞひとり吠える獅子は

どんな傷をその胸に持つてゐるのだらうか……。

秋雲

わがこゝろ哀しめども盡きず

よろこべども

きはまるところを知らず

あはれ炒るごとき夏の日に

空に浮く白き秋雲を見つゝ……。

桐の木

旦暮^{あけくれ}わがひとり住む小さき家には

庭といふほどの庭もなし

されど窓越しに見ゆる隣家^{となり}は古くよりの植木屋にて

その庭ひろびろとしてさまざまの樹木茂りたり

そがなかに一本の桐あり

まだ若桐にて

葉も幹もその影もまた眞蒼^{まさを}なり

わが眼をやる時、いつもその桐の眼に入りて

そのたびに心あらたまり、わが世の命を感じるこゝ

ちす

けふは朝より雨降りて

青さもきたひとしほなり、

なすこともなければながながと寝そべりて、
ひと日またその桐の木を眺めくらしぬ。

蟋蟀

わたしの耳に近い草叢くさむらのなかで
あの夜お前がさゝやいてくれたものは何であつたか
こほろぎよ、秋あき闌らんけて今夜もわたしはお前の唄うたごゑ
を聴きくけれども
うしなつたその夜の交情かたらひは返るよしもない……

空を焼く火焰……

近づいてくる不安と恐怖の草叢の上で

あの夜お前が私にさしやいたものは何であつたか。

霧

霧

月の出かと思つたら

あの灯あかりは

晝間は見えぬ塵埃の霧に

自動車のヘッドライトのにじんでゐる光りだつた。

活動寫眞で見た

それこそ倫敦ロンドンの町をでも歩いてゐるやうな……。

——震災直後

上總下總

本石町の通りをあるいてゐて

ふと左手にうちひらかれた遠い焼跡を眺めた、

どこまでもつゞくその緒ちやけた焼野原の果てに

ひろくとひろがつてゐるのは

あれは上總下總かずさしもがさの空でもあらうか。

——震災直後

歌

あゝわたしがもし、も少し年わかかつたなら
わたしは彼女とならんで孔雀のやうに驕りおいたも
のを

あゝわたしがもし、も少し年わかかつたなら

わたしは夜晝その戸口をみまもつてゐるだらうもの
を

あゝわたしがもし、青春の湧きたつのぞみに充され

てゐたなら

わたしは騎士のやうに彼女をその兩親の手から奪ひ
とつて奔らうものを

鳶

嵐のなかに

鳶が舞つてゐる。

空の中心にうしなはれ

— 耀かざき

見えわかずなり

鶯はうたひ、
小さくなり。

あらしの中に

鶯が舞つてゐる。

だがその聲はほがらか

その眼は晴朗。

芽

こんなころが残つてゐたのかと思ふと不思議だ、

自分の見知らぬ、忘れてしまつた種子たねが

ときならぬに芽をふきだしたやうだ。

ほかのわたしは鳴りをひそめて

たどおどろきの眼をみはつてゐる。

おそろしい勢ひでのびてゆく
この季節はづれの木の生長を
呆^{おぼ}れて見てゐる。

北風と薔薇

わたしは北風だ、
思ひもかけぬときに吹きだして
この嫩芽^{わかひ}を遠方へはこぼうとしてゐる。
ゆきすりのこの野原に
思ひもかけぬ一莖の薔薇^{さうび}をみいだして

それをこの力で引つて抜いてゆかうとしてゐる。

―その嫩芽が

みよ、わたしの方に腕さしのべてゐるではないか
ためらつてゐるではないか。

76

わたしは彼女をこの索寞さくぼくの地に置き去りにして

知らぬ他よその場所を吹いてゆくべきではないかと思ふ
またこの北風の、しかしその暖かい風懐かぜふところにしつか
と抱へて

それを寒氣と凍氷こぼりのこの季節の旅行に
さへてゆくべきではないかと思ふ。

77

北風よ、北風よ

しかしわたしは何處かでまた「春」に逢ふにちがひ
ないのだ

そしてこの峻烈なわたしの胸から

窃そつとそれを柔やはらかい野原のまん中に抱き下させる時がく

るにちがひないのだ。

そしてわたしのこの季節ときの翼で

ゆつくりと彼女を培つちかひ

われらのあたらしい花をそこに咲かさうと思ふ。

きざし

何をふるへてゐるのだ、胡蝶よ

お前にとつてそれがそんなにも怖ろしいのか、

この北風がそんなにもけだかく、抗しがたいものに

見えるのか、

胡蝶よ、お前の羽はふるへてゐる、

お前の眼は閉つぶされてゐる、

それはお前にはあまり強すぎるのだらう、

あまり唐突なのだらう。

だがお前は知つてゐる、

この北風のふところ深くどんな甘美なおとづれが匿

されてゐるかといふことを、

お前はそれに氣付き

お前はそれにめさめた。

ふるへながらお前はその手をさし出しかけてゐる

この荒い

この思ひかけぬ

このお前にとつては粗暴な手に

お前はその身體をあづけかけてゐる。

お前はふるへてゐる

だがお前の心はうごいてゐる

お前は一思ひとおもひにそのふところに抱かれて了はねばならぬ。

おまへは美しい

おまへは美しい

だが、その美は一度頹れねばならぬ
さうしてお前は一層うつくしくなるのだ。

荒々しい手

この手はあまり荒々しいかも知れぬ
しかしお前はそのなかに美をみいだすだらうよ。

北風

北かぜはそのことを知つてゐる。

北かぜはあらゆる季節の後からやつてくる。

北かぜはその奥にうつくしい「春」をかくしてゐる。

幸福

そこに何がお前を待ち構へてゐるかをわたしは知つてゐる

わたし自身を知つてゐるよりもよく知つてゐる。

人はときに不幸をさへも求めねばならない。

そこから一番あたらしい幸福をみつけてくるために

雷鳴

雷鳴よ、もしお前がわたしを奪つてしまつてくれる
なら

それはわたしの望むところだ。

その手がわたしをめざして落ちるならば、

おゝこのしあはせな不幸よ、もしもお前がわたしを

目差して落ちるならば、
あゝそれなら……

いのち

雷よ、落ちかゝれ

「あなたの戀人の命を奪りました」と
彼女につたへよ。

瞳

その瞳よ、机の向ふでわたしのを待つてゐるその瞳、
ひとごみのなかで（どんなに遠くはなれてゐても）
わたしをみうしなはないその瞳、
ながい睫毛の奥で
はつきりとみひらかれる黒い大きいその瞳。

その障は神の下した垂帳を重げに支へながら、
しかしはつきりと
わたしを見てゐる。

天使

おいで、おいで
わたしの小さい天使たち、
さびしい戸口に立つて、わたしの歸りを待ちわびて
ゐたあの子に
泣きぬれてゐたあの子に

とびかかり、ふざけ

あの子をみまもり、あの子をとりまいてゐてくれた

お前たち、

さあこの菓子をたべてくれ、

いくらでも喰べてくれ、

そしてよくあの子を知つてやつてくれ、

あの子をなくさめてやつてくれ、

小さいキユピットたち

二
篇

卷之二

二

夕暮

さあ、お坐りなさい、

暑い日中は過ぎました。

わたしたちの窓から見る

遠い墓地の樹樹のうへに、

御覽なさい

ゆふべの金星が

挽臼のやうに廻つてゐます。

さあ、お坐りなさい。

色づいた鳳仙花の花。

わたしたちの窓から見る
徑といふ徑は、

すすしいゆふ方のしめりに濕ほされて、

しつとりとどこまでも

濡れかがやいてゐます。

さあ、お坐りなさい。

あなたの椅子に。

しづかに

あなたの手をお組みなさい、

わたしたちの幸福が

どんなにこのゆふかたの

恵みふかい大氣に侵潤してゆくかを

二人でいつしよに見てゐませう。

思ひ

ふけゆく夜とともに

いよいよ深い星のころを

人よ、かの縫目のない

大空に御覽なさい。

いよいよふかく

いよいよ鮮やかに

宵には見えぬ

群星の

けざやかにも産れいづるをみたまへ。

弊なく

思ひなきに似たる

わが心のふかさを

人よ、かの

紺青の空に見出でたまへ。

日なかの星

日なかの星
星の光
星の影
星の心

日なかの星

日なかの星は寂し、

青澄める空の奥に、

白金のごとく

物言はぬ星は寂し。

物言はぬ

星はなつかし

星はたゞ一つ輝けど

わが心は迷ふ。

わが心ゆくところ知らず

わが心泥のごとき町を歩む。

悪行五篇

I 星

星はたゞ一つ輝けど

わが心は迷ふ。

わが心ゆくところ知らず

わが心泥のごとき町を歩む。

星はたゞ一つ輝けど
わが心ゆくところを知らず。

II 魚

町は泥の雨、
濡れて輝く灯のなかを
われは泳ぎいづる魚なり、

われは錆汚れたる魚なり、
深き藻のなかを
匿されたる戸のなかを、
われは物求め
さまよふ魚なり。

III 雨雲

うちつれて
何處に走るぞ、
眼の見えぬ
魚のやうに、
聲もなく

暗き町を。

たれこめた雨雲、
むしあついで
眞夜中を、
酔ひ痴れて
何處に走るぞ。

IV 蟋蟀

私はおぼえてゐる。

その窓ぎはにつるされた

壊れた籠のなかの

一びきの蟋蟀を。

みだらな、物欲しごころに、

私の眺めた

一びきの瘦せた蟋蟀を。

聲もなく

その足を天井に向けて、

危ふくも止つてゐた

一びきの蟋蟀を。

暑い遊女町の

夏の眞晝を。

紺青いろの空の奥の、

風に燦めく

水さい星を。

V 捨てた魂

捨てた魂を

拾ふは誰。

暗い空、

明るい電燈、

人ごみ、
蟲の聲、
——捨てた魂を
拾ふは誰。

120

新月

とりのこされたやうな
——空にただひとつ

美しい人の指から剪られた
爪のやうな

121

新月。

雨

雨の糸、雨の糸、

お前のそのもつれから、

そのひかりの煌めきの間から、

私は雨に濡れた故郷の街を見る。

雨の糸、雨の糸、

お前のその悲しい階調のなかから
あたらしい涙は
にじみ初める。

124

湖へ、遠い湖のおもてへ、
急行列車の屋根の上へ、

雨の糸、雨の糸、

お前は回想の涙をまじへて
降つて行く。――

125

祈禱

いづくより

君は來し、

いづくより

われは來し、

相抱き

神をぞ禱る。

幽暗の

月のひかりに

眼も見えず

聲さへおろか

うち伏して

神をぞ禱る。

いづくより

君は來し、

いづくより

われは來し、

ただ夢ぞ

——神をぞ禱る。

湖

湖に糸垂るる人あり、

蕭々と

雨降り、

遠くうれひに霞みて

比良は曇れり。

糸を垂る

糸を垂る

聲もなく、

水^みぎは、

霞生ひぬ、

なくさまぬ

ころかな
糸を垂る
たゞひとり。

蜻蛉

遠い並木に
雨降りて
わがゆく道は
片あかり。
わがゆく道は

あかあかと
夕日眩しく
片照りの
雲にまぎれて
蜻蛉とぶ。

河原

ひとりで
河原に
出て行つた。
ひとりで

石を
投げてゐた。

ひとりで

今日も

歸る子よ。

眺め入る

庭の土、

しんしんと

雨は泌みゆく。

眺め入る

速き湖、

灰いろの
雲ぞうごける。

聲もなく
われらふたり。

雲

うちつづく

雨に、

うごかぬ

湖の上の雲。

くろぐろと

今日もはびこる

うれひ——。

うごかぬ

湖の上の雲。

祈れる山

わが見るは

祈れる山の姿

をさめられし

ふたつの翼。

日のもとに
遠くひとみを合はせ
祈れる山
その晝の
聲なき姿。

わかかへで
のびよ
のびよ、わかかへで
さつきのそらに
くさのこと
のびよ、のびよ

わかかへで。

うつつのゆびの

てをひろげ

のほれよ、のほれ

わかかへで。

蟬

かなかなと

蟬は啼く。

思ふこと

はるかなり

湯島切通し

黄昏

君とくだる

湯島切通し

遙かに灯も見え

往來

しげし。

哀憐の

心、蔓のごとく

からみて。

夏の晝。

ふるさとは

遠きあなた

かなかなと

蟬は啼く。

夕日

ひねもす歩み疲れて

わがゆくは東京

風白き町

阪の上に

夕日きらめく。

湯島切通し

黄昏たそがれ

君とくだる

湯島切通し

遙かに灯も見え

往來ゆきき

しげし。

哀憐あわれの

心、蔓つるのごとく

からみて。

黄昏、
君とくだる
湯島切通し。

すみだ川

すみだ川
流れたり
灰いろに
今日も曇りぬ。

かもめどり

水にうかべり

音もなく

みちくる潮しほ

ダリア

顔挙げしダリア

紅きダリア

窓をひらきぬ。

日に燃ゆるダリア

金のダリア
歌をうたひぬ。

うなだるるダリア

暗きダリア

窓を閉ぢぬ。

蟬

いじと啼く

暑き眞晝、

家は留守、

窓のうち

赤きダリア。

いと静く。

あさのみそしる

こゑもなく

きみとむかひぬ

こゑもなく

あさのみそしる

ひえしをすする。

風知草

くらき空

あらしやきたる

さ揺れつつ

風知草

かぜになびける。

さくら草

すぎゆく日

一人を伴へる

わが旅はしづかなり

あしたには井戸のほとりめぐまれし水をむすび

夕ゆふべ、またほのぐらき窓のもと

たのしくもすぎゆく日をいのるなり

いかなる國より

いかなる國よりこし人ぞ

あえかにも

わが前に來たまひし。

いかなる國より

162

こし人ぞ

わがふところに

眠りたまひぬ。

163

山の奥より

海に入りて死せし子は

山の奥より生れ來ぬ

山の奥よりしのびかに

咽び泣く音の洩るゝなり。

君わが名を呼ぶ

黄昏となれば

君、わが名を呼ぶ。

われらかくあるを不思議とて。

いかなればわれらかく共に棲めるならむ